砂名の ベトナムに乾杯

第22回　外に一歩も出られない状況に陥った人々

コロナ禍で二週間、家から一歩も出ることができないもっとも厳しい社会的隔離が施行された。事情や状況は違えども、外に出る自由を奪われた人々のことが脳裡をよぎる。

1989年自宅軟禁、1995年自宅軟禁解除。その間ノーベル平和賞を受賞（1991年）。2000年ふたたび自宅軟禁、2002年に解除。2003年3度目の軟禁状態に置かれ、外部からの訪問はほぼ完全にシャットアウト。解除されたのは2010年。「アウンサンスーチー」氏である。ざっと15年の自宅軟禁だ。

映画【The Lady アウンサンスーチー ひき裂かれた愛】を観たのはずっと前のことだった。自宅軟禁ながらも勉学に勤しみ書を嗜み、ゆたかに過ごしているように見えた。しかしいざ自分が自宅から一歩も出られない状態に置かれてみれば、かなり精神的にキツイということが身に染みて分かった。社会的隔離に至ってはすでに2ヶ月になろうとしている。解除後の計画を立てたり前向きなことを考えられるのも最初のうちだけである。しだいに先行きの不安とともに気持ちは塞ぎ込んでゆく。私たちは外出して見咎められれば罰金が科せられるが、アウンサンスーチー氏の場合は常時軍に見張られ、門前にはいつも兵士が立っていた。その心境やいかばかりか。

さて「外に出る自由を奪われる」と言えば「刑務所」である。

もっとも厳しい外出禁止の社会的隔離下の下町のようす。食糧配給の準備か？

知人の脚本家のお弟子さんで賞を取った方がいらして、授賞パーティーに招かれたことがある。はるばる九州からご両親が上京され、挨拶する息子さんの姿に涙ぐんでいらした。その光景が目に焼き付いた。

たまたまその受賞者の方と帰りが同じ方向だったため、タクシーに同乗させていただいた。温和な物腰、話しやすい人柄に、映画の話などとりとめもなくしていたのだが。ふと「これまではどんな作品を？」と聞いてみた。「僕は36歳のときに脚本家を志しましたから」ずいぶん遅咲きだ。「それまでは別のお仕事だったのですか？」「いえ、刑務所に入っていました」。失礼は承知の上だが、止まらない。「何をなさったのですか？」。すると、まるで天気の話でもするかのように答えが返ってきた、「人を殺しました」。「ああ、そうですか」と、私もまた「今日も雨ですね」のごとく返したのだが。あのご両親の涙の意味が氷解したのだった。

丸内 敏治（まるうち としはる）。脚本家。1971年、学生運動で逮捕され九州大学中退。12年に及ぶ裁判闘争と2年半の服役後に36歳で脚本家を志し、荒井晴彦に師事。1999年『地雷を踏んだらサヨウナラ』で菊島隆三賞を受賞。現在、日本映画学校で講師を勤める（Wikiより）。

私の母校では、すでに下火になっていた学生運動がまだ私たちの時代にもくすぶっていた。内ゲバか機動隊と衝突したか、不幸にも人を殺傷して実刑判決を受けた学生もいた。丸内氏のケースも特段珍しいとは思わなかった。獄中で「荒井晴彦」の脚本に出会ったと聞く。しかしよほど強い志と精神力がないと、服役後に脚本家として成功するのは難しいだろう。脚本家になりたい人間はごまんといるからだ。

今、家から一歩も出られない境遇に陥って、そんな話をつれづれなるままに思い出し。私はまだまだなんと恵まれているのだろうと思う。

月森砂名（つきもりさな）

奈良県出身。同志社大学卒業。2015年、ベトナム初の角打ち【日本酒で乾杯！】に続き、2020年、Pham Viet Chanhにて日本酒専門の「角打ちのある酒屋」【蔵 KURA】をオープン。経営に携わる。東京で舞台撮影や制作の仕事をする傍ら、作家活動を行う。2009年よりNPO法人Layer Boxにて、日本の伝統文化について、大学、高校、専門学校とともに、PV、3D、CGなどのコンテンツ制作および世界発信を行う。

p0_砂名の□ トナムに乾杯_22.indd　34　　2021/09/14　9:06